丹精のサツキ 療養の励みに

自身も難病経験 久木崎猛さん経営の園

「さつき祭り」催し患者らに贈る

鹿児島市石谷町の「ナスカさつき園」で約400種2千鉢近くのサツキが見ごろを迎え、「さつき祭り」が開催中だ。園を運営するのは、手足などが動かなくなる神経の難病「ギラン・バレー症候群」の後遺症を抱える久木崎猛さん(67)。11回目の開催となる今年は、自分と同じく療養生活を送る人を励ましたいと、サツキの苗木を贈っている。

赤や白、ピンクなどの多彩な花を咲かせる園内のサツキに、多くの来園者が見とれていた。「魅力は花の美しさ。品種によって、一つの木に5～6種類の花が咲くんです」と久木崎さんはほほえむ。

サツキと出会ったのは、化粧品会社の社員として神奈川県で働いていた25年ほど前。偶然立ち寄った展示会で、「こんなきれいな花があるのか」と一目ぼれした。その場でサツキを育てる愛好会に入り、手入れの方法などを学びながら90人以上の会員と交流した。他県への転勤で手放した時期もあったが、気付けば約6千本のサツキを育てるまでになっていた。

体に異変が起きたのは49歳の時。目が覚めると指先にしびれを感じ、昼には手首にまで広がった。翌日には階段を下りることも難しくなって入院。数日後には体が動かなくなった。年間10万人に1～2人しか発症しないギラン・バレー症候群と診断された。

ベッドの上で人工呼吸器をつけた久木崎さんは、目の動きで50音表の文字を追い、看護師に伝えた。

「し・な・せ・て」

入院とリハビリの生活は2年8カ月に及び、30年以上勤めた会社は退職せざるを得なかった。そんな毎日で印象に残っているのが、妻の恵子さん(65)が一度病室に持ってきてくれたサツキの美しさだった。手の指や足が動かしにくい後遺症は残ったが退院し、自宅療養をしながら、再びサツキを育て始めた。

とはいえ仕事はできず、話し相手もいない。「ずっと営業職で、話すことが仕事でしたから」

そんなときに思い出したのがサツキの愛好会。「仕事がないならつくってしまおう」と2006年、サツキの育成・販売などを手がける会社を設立し、翌年に同園を開園。鹿児島で愛好会も発足させた。現在は3人の従業員と花の世話に精を出す毎日。愛好会の会員は20人を超えている。

贈呈用のサツキの苗木を持つ久木崎猛さん＝鹿児島市石谷町

最近は久木崎さんが難病を乗り越えた経験を持つことを知った闘病中の患者が、園を訪れることが増えた。「元気をもらいました」と、涙ながらに久木崎さんの手を握ったがん患者の女性もいた。

体調がすぐれずに病院に行った際に思った。「サツキの花があれば、少しでも病気のつらさを忘れて癒やしになるのでは」

今年も先月28日から始まった「さつき祭り」。療養中の人に無料でサツキを譲り始め、これまでに夫を亡くした女性、がん患者の男性などに自慢のサツキを贈ったという。「サツキに救われた命。自分のように少しでも救われる方がいれば」と久木崎さん。サツキの美しさが、悩み、苦しむ人たちを支えてくれると信じている。

6月10日まで。問い合わせは同園（099・278・5412）へ。

（小瀬康太郎）